

目 次

| | | |
|-----------------------------|------|----|
| 街角の声——総合科学部に対する内外の反響—— | 3 | |
| 私の研究 | 杉浦成昭 | 6 |
| 「生きている」ということ | 石井直人 | 7 |
| 総合科学と科学者の社会的責任 | 黒岩祐治 | 9 |
| 大久野島よりの便り | | 10 |
| スポット「Creative Writing」の正体!? | | 11 |
| 研究室レポート——初めてのパス・ディ—— | | |
| 地域文化コース—— | | 15 |
| 社会文化コース—— | | 16 |
| 情報行動科学コース—— | | 17 |
| 環境科学コース—— | | 18 |
| 50年度新入学生調査報告——学生相談室—— | | 22 |
| 学部の記録 | 人事異動 | 24 |
| | 各種行事 | 25 |
| 編集後記 | | 26 |

街角の声

— 総合科学部に対する内外の反響 —

＊

＊

＊

憂える二十世紀末、人々が尽きることのない富を求め、繁栄を奢ってもそれは一部の人々のものでしかなく、人々が満ち足りた笑みを浮べて現在に安住していようと、それは自分のまわりに平安な小世界を築いているにすぎない。ひとたび目を移してみると、世界を覆う暗い陰は、あるいは公害問題として、あるいは食糧問題として、新聞のそこそこみられる。こういった人間個人としてではなく、人類そして社会としての諸問題に対処するには、従来の狭く深い学問を身につけた専門家だけでは、手にあまるようになってきた。個々の病根がそれぞれ関連し合い、一つの大きな負の現象として顕われてきたのだ。それではどうすればよいのか？ — 時代は大きな視野を持ちしかも専門的な知識も豊富な人材を要求する。そんな困難な要請にこたえて発足したのが我総合科学部である。総合科学という大命題を肩に、我学部の歩む道は遠く険しい。一学部生としても、不安もあり悩みもある。既成の学部ではとうてい成し遂げられないであろうことをやろうとしているのだから……。

さて、総合科学部の発足が時代の要請にこたえるためであるなら、我々は総合科学部という一学部として孤立し歩んでゆくべきではない。時代とともに社会とともに歩まねばならぬのだ。そして我々は、常に外部からの目を意識しなければならないだろうし、また注目されねばならない。そこで今回、我々の側からの外部へのアプローチとして、ささやかではあるが、「総合科学部に対する内外の反響」というテーマで街角の声をインタビューするという企画を立てた。

いったい我学部はどのように受けとられているのか？

(尚、表記上の問題として、質問は敬語等を除き) 簡潔になるよう努めた。

広島英数学館 (大学受験予備校にて) —

Sample 1 (男)

- 総合科学部を知っているか？
— 知っている。

- どういう学部だと思うか、また興味あるか？
— 僕は医学部を受けるつもりだから全然関心ないですネェ。あれは何か、大学の学部という感じがしませんネェ。
- 具体的に？
— 専門というものがいいでしょう、他の学部みたいに……。何か中途半ばな感じがしますネェ。だから総合科学部ができた時に、いったいどうなるんだろうかって、そう思いましたネェ。
- 将来性は？
— そうですネェ、わかりません。まあ、卒業生が出てからでしょうネェ。

Sample 2 (女)

- 総合科学部を知っているか？
— 知っています。
- どういう学部だと思うか？
— エート、文系と理科系のあいのこみたいな感じ。
- レベルはどのくらいと思うか？
— いいと思うけど、わかりません。
- 総合科学部の者をどう思うか？
— 尊敬しています。

Sample 3 (男)

- 総合科学部を知っているか？
ええ、一応。去年冗談で受けてみようと思ったんですけど、まあ結局工学部にしましたけど……。
- どういう学部だと思うか？
どういふのかなあ、四つぐらいにわかれているんでしょう？なんか僕らのイメージからしたら、教養学部いうんですか、あれの延長みたいな感じで、ハッキリとした学部の姿がでないみたいな感じがするんですけどネェ。
- レベルはどのくらいと思うか？
さあ、まだ二回しか取ってないし、何かハッキリしたことはいえないけど、僕の場合総合科学部と工学部と、どっちへいきたいかといえば、

やっぱり工学部ですネエ。まあ、あの学部の内
にコンピューターを使うコースがあるというの
で、色々先生から話を聞いたりしたんですけど、
でも、やっぱり全体的には、工学部ですネエ。

Sample 4 (男)

- 総合科学部を知っているか？
— まあ、受験生だから。
- どういう学部と思うか？
— さあ、知らんぜヨ、俺は。
- 興味はあるか？
— 全然ないネ。
- 将来性は？
— そんなこと、説明しようがないですネエ。

広島Y M C A 予備校にて —

Sample 5 (女)

- 総合科学部を知っているか？
— はい。
- どういう学部だと思うか？
— さあ、よくわかりませんが。
- どういった方面に進むのか？
— 私、一応理学にしているんですけど。
- 総合科学部に環境科学コースがあるのを知っているか？
— いいえ、知りません。
- 総合科学部にいく気があるか？
— いえ、まだ新しいからよくわからないし……。
- それは就職とかいった現実的なことからか？
— いえ、そういうことじゃなくて、内容的にど
んなものがあるか全く知らないから。
- 今から変更する気はないか？
— (笑)
- 他の人々はどう思っているか？
— さあ、どうかわかりません。
- レベルはどのくらいと思うか？
— そうとういいんじゃないかと思うけど。

Sample 6 (女)

- 総合科学部を知っているか？
— 私、広大だから。
- 何学部？
— 教育の小全です。
- 新しくできた総合科学部をどう思うか？

— 総合科学部ですか？あれ、専門がなく、一般
的な教養の延長じゃないんですか？

- 新しさを感じますか？
— さあ、新しさ…… (首をかしげる) 総合科学
部の人がやる、地域文化コースとかいったもの
を取ってないからよくわからない。
- 教育学部の人からみて、不満とかうらやましさと
かは？
— うらやましいとは思わないけど、あそこ結局
なにするんです？でも地域文化の研究とかやる
んでしょ、あれなんか、いいんじゃないですか。
- レベルはどのくらいだと思うか？
— いいと思いますよ。

本通りにて — (広島一の日抜き通り) —

Sample 7 (女……20才前後)

- 総合科学部を知っているか？
— さあ。
- 大学生か？
— いいえ、違います。
- 総合科学部の発足が新聞に出ていたのを見なかつ
たか？
— あまり新聞みないからネ。
- 総合科学部に全く関心ないか？
— ウーン……。 (返事に窮す。)

Sample 8 (男……45 . 6 才)

- 総合科学部を知っているか？
— 知ってます。
- どういう学部だと思うか？
— ちょっと、細かいことは知らんけども、教養
学部かなんかの色んな科をいっしょにしたもん
じゃないかな。
- どの程度将来性を感じるか？
— さあ、そこまで考えてみたことがないので…
…。
- 職業は？
— 高校の教員です。
- 総合科学部を受ける人がいるか？
— いると思いますが、私、その方面にタッチし
てないので……。

Sample 9 (女……二人連れ)

- 総合科学部を知っているか？

— はい。

- どういう学部だと思うか？

— さあ、名前は知っても、内容は知りません。あまり目立たない学部というか、学科じゃないんですか。

- 新しいイメージを受けないか？

— とにかく、よく知らないから。新しいとか古いとか……でも、いったい何をしよってんです？普通、工学部電気科とか、教育学部何とかっていったら、ああ、あそこはああいうもんだなってわかるけど、総合科学部っていったってわからないでしょ。将来何になるのかっていうようなキザシがみえない。

- 大学生か？

— ええ、女学院です。

Sample 10 (女……50才前後)

- 総合科学部を知っているか？

— 広島大学の総合科学部？知りませんネェ。広大へいける程できる子がいないもんだから……。あまり、関心ないんです。

- 近所で話題にのぼるか？

— さあ、聞きませんネェ。か^かが^が部^部といひますと、何処へ属するんですか？理学部なんかといっしょなんですか？

Sample 11 (男……60才過ぎ)

- 総合科学部を知っているか？

— はあ、名前は知ってますがネ。

- どういう学部だと思うか？

— さあ、3つぐらいわかれているのは知っているが……。でも総合科学部という看板が出来た以上、先生方に全てまかせないで、学生諸君がしっかりとやるようになったらネ。でも、私は、学生諸君が4年間でネ、総合的にものを見、判断できるようになるのはたいへんだろうなって、そう思うんですヨ。

- 職業は？

— 教官です。

(了)

—— インタビューを終えて ——

総合科学部は知られていなかった！これが取材後の卒直な意見である。取材サンプルは数多く集める

に越した事は無いのだが、如何せん限られた時間と人力不足 — 知力不足？ — では40件ぐらいが精一杯であった。又紙面の都合で、その一部しか載せる事が出来なかったことを御詫び致したい。

学外者に総合科学部に対する意見や感想を求めるという試みは初めてであるし、その存在意義と言う風な大袈裟なものではなく、「総合科学部は、知られているか？」と言う程度で取材をものしたのである。そのサンプルを検討した結果、やはり一般の人と受験関係者との間に認識の差が見られた。現代の風潮からすれば此れも当然と言えるかも知れない。地元と言うことで可成り知られていると期待していたのだが、見事!!その期待は裏切られてしまった。これはインタビューの中にも有る様に、学校当局の手落ちでもある様だ。もう少し、斯界の俊秀を馳せ参じせしめるアピールが有っても好い様に思える。

それでは個々について言及してみたい。まず、受験関係者の間には三つ注意すべき点がある。一つは総合科学部が、教養課程の延長だと誤解されている点である。はっきり宣言しよう。総合科学部は断じて教養課程の延長ではない。彼等は「理系でも文系の講義をある程度聴講する、逆に文系でも理系の講義をある程度聴講する」と言うことを浅く広い雑学的なもの — つまり教養課程の延長 — と感違ひして捉えているのであろう。第二に、文系と理系との接点・中間と捉えている人も多いという点である。文・理の橋渡しの役割という点では当たらないとも言えない。しかし、その程度や範囲という点で問題が残るが、それは他の回の紙面を借りるとして、この場ではインタビューのサンプル検討だけに留めて置きたい。第三に、受験生の間では卒業後の進路が不安であるという意見が多かった点である。この点で一期生としての我々は責任重大であるが、学部としての見通しがはっきりすれば、この点は解消される様に思えるのだが…。

次に本通りでのインタビューに目を移してみたい。新しい学部のせいか、殆んど知られていなかった。多くの人に「総合科学部を御存知ですか？」と息込んで訊ねてみても、たいてい「知りませんネ」と肩すかしを喰わせられる場面が多かった。運よく教育関係者の人達に出喰わしても、名前程度は知っている、と言うぐらいで、認識という点では一般の人と大差はなかった。

結論を言えば、「総合科学部は、知られていなか

った。」という事である。学部に対する反対意見も多々あったが、概して言えば無関心と見るのが妥当な様である。

大学当局や、総合科学部生は世間一般の人々が総合科学部に興味を示すことを望んでいるし、優秀な人材を求めている。この為にも、差当って受験生諸

君に総合科学部に関する正しい知識を持って欲しい。

創業守成いずれが難きかを問う段階ではないが、既に未知への航海へと船出したのである。ルビゴン川は渡らねばならぬ。これを渡ったシーザーは立派だったし、我々も学問の海を征覇せねばならぬ。

私 の 研 究

杉 浦 成 昭

私の研究分野は数理統計学、特にノンパラメトリック検定と多変量統計解析である。なぜこの分野をやるようになったか反省してみると、いろいろな初期条件に左右されたことと共に数理統計学が持つ多様性にもあると思われる。それは純数学的に $\epsilon - \delta$ で議論する分野から、いろいろな確率現象すなわち工場製品の品質管理、生物の突然変異発生率の解析、薬の効果の判定、心理実験の分析等に貢献できる手法の研究であるから自分の好みに応じたところに落ち着けるという特長がある。事実近代数理統計学の創始者といわれるフィッシャーは始めイギリスの農事試験所において農業実験を基に統計理論を作ったし、それより前の今日スチューデントの t 分布と呼ばれているものを導いたゴセットはイギリスのビール会社の技師であった。又これらを定式化したネーマンは数学者であるというように出発点から多彩である。

さて、ノンパラメトリック検定はウィルコクソンが1945年に今日ウィルコクソン検定と呼ばれるものを考え出したのが始まりであるとされている。人によってはそれより2年後に独立に発表されたマン・ホイットニーの論文を認めてマン・ホイットニーの検定ということもある。皮肉なこと一番手であるウィルコクソンの論文は短いもので何を主張しているのか判読しにくいのに反しマン・ホイットニーの論文は数理的に書いてあり明快である。そこで当初はウィルコクソンよりマン・ホイットニーの方が有名になったのではないかと想像される。途中いろいろな経過があるが、1965年私がこの最も基本的なウィルコクソン検定を多次元で考え、その性質を調べたところ世の中同じようなことを考える人が必ずいるものでアメリカのセン（北カロライナ大）ブリ（インディアナ大）ピッケル（カリホルニア大）バップカー（ケンタッキー大）ブラッドレー（フロリ

ダ州立大）等が相前後してそれぞれ独立に似たようなことをやっていた。勿論研究には各人の個性が強く現われるので内容も少しずつ異っている。筆者は日本の大学紀要に発表していたためか、当時外国からはほとんど無視されていたような感じを持っている。更にひどいことには、アメリカのえらい先生から「同じような結果がアメリカで既に得られているにもかかわらずぬけぬけと論文にして発表するとは何事か」とひどくお叱りの手紙を貰い一時しょんぼりしたことがある。若い時代は自分の研究に自信が持てないから権威に弱くなる傾向がどうしても生ずる。最近になって学術雑誌バイオメトリックス（計量生物学）1971年号でブラッドレー・パティル・ウエカリー3人がノンパラメトリック検定に関する共同論文を発表し、その中に次の一文を書いた。

Previous authors in this problem area have sometimes been unaware of the work of others. Fisher [1935] predated Pitman in considering univariate, twosample, randomization tests. Wilcoxon [1945] and Mann and Whitney [1947] introduced ranks for observations...., Chatterjee and Sen [1964], Bradley and Patel [1965] Sugiura [1965] and Puri and Sen [1966] considered some large-sample properties of the multivariate tests. Related papers by Tamura [1966] Bhatlacharyya [1967], and Sen [1965] are noted.

これで私が死んでも私のささやかなこの分野への貢献は残ることになったと大いに心を安じた。昔おこられた先生とはこの論文を書いたB先生に外ならず、学術雑誌に発表されるということはほぼ公認に近いからである。因みにB先生はフロリダ州立大統計学

教室の主任教授をずっと務めるボスである。しかしながら認められた頃には御当人は既に歴史上の人物であった。なぜなら上記英文は論文本体ではなくヒストリカルノートの中の一文である。ウィルコクソン検定は最近よく教科書にも解説され実用に供せられているのに多次元のウィルコクソン検定は作られてから十年近く経つにもかかわらず未だ十分に使われていないことを残念に思うのは筆者のひがみであろうか。

最近では離散型データの解析にも関心を持っている。ここではカルバックの情報量が登場し我が所属の情報行動科学コースに相応わしい研究になるかも知れないと思っている。(99年先か?)

さて、最後に現在最も盛んに研究中の多変量統計解析についても述べるべきであろう。この分野は1929年にウィッシュャートが今日ウィッシュャート分

布と呼ばれる正値対称行列上の確率分布を見つけたのが、始まりとされている。これ以来多くの人がこの分布の導き方を簡単にするのに努力している。数学者であるシーゲルも二次形式の研究においてウィッシュャート分布を独立に発見しているがそれは6年後の1935年であった。その後ウィルクス、ラオ等の研究を経て1958年アンダーソンが「多変量統計解析入門」をウィリーから出版するにおよんでこの分野が確立した。我々の努力は一言でいえばこの本で出来なかったところを切り開くことにある。対称行列を変数とする超幾何級数、あるいはそれに対する偏微分方程式等の登場により可能となったのである。各種統計量の分布の漸近展開を最近かなり片付けることができたので、目下はウィッシュャート分布の固有値、固有ベクトルについて調べている。

(情報行動科学コース教授)

「生きている」ということ

石井直人

今日を生きる我

さらに明日を生きんとす

先日、私は某精神病院を訪れた。その日は、初夏の陽射がまななく木々に反映して、とても快い日和であった。それは病院が雑然とした市街を離れ、澄んだ空気の高台にあった所為かもしれない。病棟は南向きに建てられていたので、普通、世間で思われているような陰惨とした様子は全くなかった。それでも私が、ふと病棟の白塗りの鉄格子の中に動く人影を見た時、無意識に言い様のない戦慄を覚えたのは確かだ。「精神病患者」という言葉に対する潜入感が頭について離れなかったようである。患者病棟の中に入った瞬間、患者達の疑惑に満ちた射るような視線を、私は感じないわけにはいかなかった。その時、彼らと我々外部の者との間にどうしようもない奇異な溝があるのを私は感じた。「住んでいる社会が違うからだ」と言いきってしまいたくないような何か、そうやってしまっただけは悲しくなってしまうような何かを。はっきりとは言えないが、私の求めていたものは、同じ人間として同胞であることの喜びのようなものであったかもしれない。無論、私達の見えざる心の態度に第一の原因があるのは言うま

でもない。傍観者としての目を捨てることができな
いかぎり求めるものはやってはこないのだ。

老人の眼は黄色くよどんでいたが、若者のそれはガラス玉のように恐いほどきらきらと輝いていた。正直言って、その目に接した時、私は美しいとは思わなかった。それは、美しいというのには、あまりに透明すぎたのだ。彼ら自身を角膜の振れの中に感じたのは私の錯覚だったのだろうか。さて、病室内の患者はたいていじっと横臥しているだけである。午後の太陽が照りつけるこの一時、活発に息づいている世間とは裏腹に、彼らは沈黙し、その眼をむなしく宙に静止させることしか知らない。私には、その沈黙がますます彼らの狂気をあおっていくように思えてくるのであった。時折り、立って歩く人はいるのだが、そういった動きは常同的でスローモーションビデオを見ているようである。それはまさに移動であった。空間だけが空虚にあり、時間はまるで静止していた。

長い病棟の端には重症患者用の独房があり、レストルームという名で呼ばれている。著しい妄想をきたして人々、患者内でのなわばりからはじき出された人が強制的に、もしくは自主的に入る所である。彼女は独りでその部屋にいた。部屋は全く、外部

からの観察が可能になっており、ここにはプライバシーというものが無い。医師はどこからでも彼女を観ることができるのだ。そしてここにもやはりあの白い鉄格子で囲まれた比較的大きな窓があった。私は、その窓からのぞいた外の景色を今でも忘れることができない。格子の枠から、こぼれるように光っている自然。それは、我々—隔離を知らない者—にとって、いつどこでも自由に見ることの出来る木々であり、山々であり、青空であった。しかし、彼女にはこれきりしかなかったのである。隔絶された個室から見える景色は常に同じである。(もちろん、1日の時間帯によって、その色彩は変化するだろう)太陽は数時間程度で彼女の視界から消えうせてしまう。眼前、陽光に照り輝き、美しく波うつ枝々があまりに悲しい。木々の端端からは、人家さえも顔をのぞかせるのである。それは彼女にどれほどの人恋しさをもたらしていたであろうか。そしてこれは、彼女だけに言えることではないのだ。ここには、若い頃から入院と退院とを何度もくり返す、ついには老人性痴呆となり幾十年も世と隔った生活をしている人々が大勢いるのである。一抹の狂気が彼らの背をよぎったのは、もう何十年も以前の事なのである。そして彼はやがて死に至るのであろう。一体、彼は何十年もの間、何を見、何を感じて生きてきたと言えるのであろうか。楽しかった、そして生々していた幼い日々の思い出は、もはや混濁した意識の中で反芻し尽されて、分解してしまっているであろうか。それは、あたかも生れてから死ぬまで眠り続けた人のようである。そして、私達はこうした人達と無関係に生きている。否、無関心に生きているというべきであらうか。悲しいかな、自分を無関心にしていかねば、生きてはいけないのだ。事実、私も、今日こうしてここに来なければ、彼らを知らずして日々を送っていたことになる。

こういった厳しい現実と接した時、私はおのずから、人間の「生」と、「死」について考えざるを得なくなってくる。

米

日本において、精神病者や自殺者、そして彼らをとりにくく家族等々に対する世間の疎外には著しいものがある。(これは、もちろん日本だけに限られたことではないが……) どうしてこのように偏見の目で見るのであろうか。私はこう考える。日本人は、欧米人に比して総じて、個自身を考えるのではなく、

それをとりまく場を先に念頭に入れて行動してしまっているのではないだろうか。日本においては、より多くの他の個に認められることなしには生きてはいけないのである。もちろん、人間が社会を作り、その中で生きていく以上それは、もともと、さげられないことかもしれない。そういう場において、アウトサイダーやほみ出し者は場についてゆけなかつた者にしかすぎないのである。そしてそのオリジナルな人々(世間ではアブノーマルといっているが……)は、すみの方に追いやられて忘れ去られてしまう。より根本的な恥部からの逃避が、より強い忘却を必要とするのである。私はそこに「死」に対する人間の生来的な心理を観る。文字通り、絶対的、不可避的な死に対する恐れからのがれるために忘れ去ることは誰にもやってこよう。これはもちろん、認識というものが一瞬で、何かのきっかけで触発されない限り、意識の底にしまっているからだとも言えるのであって、正常な状態に在るのならより以前の認識は新たな認識によって打ち消されていき、忘却は常に行なわれているものである。だからこうした忘却作用は生きていくものにとっては欠くべからざるものなのかもしれない。さてここに興味ある事実がある。それは日本人が、上述した死への恐怖に相反するかのように、死—とりわけ自殺—を美化する傾向があるといわれているという事である。カトリックでは、自殺が禁忌となっており、殺人罪に相当し、仏教の戒において殺生の禁が自殺を判然とは含んでいなかった事は周知のごとくである。それでは、日本人が好むというこの死の美化とは一体どういうことなのだろうか。この例として思春期の若者の自殺が一番手頃であらう。一口で言えば、彼らは醜い現実を経験する以前にしか生きていず、人生という未知なものに対して一種の美的観念を持っているのである。そして彼らのpureな自我によって、未知の世界への投射としての死の世界における自己の客観化に早々と正当性を与えてしまうのである。そういった客観化の心理はわずかな経験的感覚と一見あたかも壮大に見える論理的精神によって瞬時に築きあげられる。もちろん、これは典型的ケースの—解釈にすぎない。しかし自殺が人間の本来の業と結びついていると言うことはできるであらう。この業とは人間が「生きている」ということであり、生きているかぎり「孤独である」ということである。そこから私なりに考えてみると、どうしようもない事

態に直面した場合に、より早くそれに対して内的な答えを出しやすい人、自分の生の混沌（これは生への恐れという言葉で表わせるかもしれない）を認知するとそれをごまかすことができなかつた人、自分をだませなかつた人に自殺が多い気がする。さて我々の「生」の世界から見れば、「死」は絶対化である。人間というなまじ知能をもった動物が死即絶対化即純化というめんどろな観念を持ってしまった。そして純化とは純粋形体としての美の観念と結びついているであろう。その観念を直観的に想起し、死において純化される事によって不合理で不完全な自分を、そしてこの自分をとり囲む諸々の世間とおさらばしたいという願望がわき起るのである。しかし客観化された美とはまさに人間の創り出した観念以外の何物でもない。人間の持つに至った美という観念は究めても究めても究め尽されない絶対化という意味で死という観念のより生的な解釈ではなからうか。例えば今、乙君が死んだとしよう。我々は彼が

至った「死」において我々自身の「死」を考えずにはおられない。そこで私達は「死」というものが、「生」と表裏一体であることを再めて認識する。そして我々は彼の死を嘆くであろう。この死者を嘆く行為には、実は、自分の来たるべき「死」に対する無言の恐れが秘められているのである。我々は死者達に一すでにこの地上から消えうせてしまった者達に必死に叫び、訴える。しかし死者達の叫びは聞えない。そこにはただ沈黙があるだけである。この一方的な意志の志向が、またその悲痛な叫びが、現実には芸術となって具現されてくるのではないか。それはとりもなおさず「死」の観念と「美」の観念の発現基底が同一だからではないだろうか。長い人間の歴史の中であたかも文明の余剰生産物のごとくに見える芸術が人間生活に切実で欠くべからざるものとして続いてきた理由がそこにあるように私には思える。(了)

総合科学と科学者の社会的責任

環境科学コース 2年 黒岩祐治

「総合科学部」が文部省、国会で認められて1年余りが過ぎた。私は疑問に思うことがある。それは「教養部」が「総合科学部」と名称を変えたが、総合科学部の先生方の研究なり学問に対する態度なりが、その間どのように変化し、また新しいものを付け加えたのか、ということである。学部発足時の、抽象的理念を口で唱えることは、誰にでもできる。「総合科学」について多少なりとも前進がお有りなら、それを次号以下の本誌「飛翔」において明らかにしてもらいたい。学生と先生方との意見交換の為に。

次に、私の考えていることを書いてみたい。なぜ「総合科学」なるものの必要性が、認識されるようになったのか。

科学知識（特に自然科学）の集積と、それと関連をもつ技術の拡大に伴って、特に産業革命以後、科学技術の実利的応用（軍事利用、商品生産など）への欲求と国家からの要請が強まった。そして、その研究をする基礎から応用に至る科学者が求められた。

科学・技術の知識量が相当の量となると同時に、それぞれの分野にはまだまだ未知の部分が多かった。そのために、科学者やそれを目指す人々は、自分の分野を限定してしまい、科学者の専門化・細分化が進行した。“生きてゆくため”と称する科学者同志の卑少な競争が、その傾向を強めた。これらの傾向は、20世紀に特に著しい。

科学者は、この細分化の方向にそって、何がしかの成果（中には大きな成果もあるだろうが）を得て、研究者としての地位が確立する。そして、これ迄の自分の方法に満足し、これで良いのだと思ひ込む。これと並行して、科学者は社会的責任を忘却して、それを認識しなくなる。仮に、何か問題となること分かって、それへの対処は“専門外”として、他に責任を転嫁してしまい、対処方法を考えようともしないのである。

この具体例が、欧米各国の帝国主義への科学者の奉仕であり、大日本帝国・ナチズムへの科学者の奉仕であり、公害企業への科学者の奉仕である。

このようなことが現実であるからには、現行科学の方法・発想には欠陥があるのであり、これを補うものとして、まだ未知の「総合科学」の必要性が認識されたのだ、と私は思う。

それでは、「総合科学」とはいかなるものだろうか。これまで考えてきたことの一部を書いてみたい。

「総合科学」要請の経過からも明らかなように、人間を含むあらゆる自然についての基本的認識（宇宙～星雲～天体～生物（人間社会）～分子～原子～…）を、一つの頭の中で有機的に深めてゆくことが重要だろう。この実践において忘れてはならないことの第一は、社会全体がこの認識を欠いた上での、更なる科学・技術の応用は、機械文明の発達した国を、頽廃と破滅の泥沼へ押し込む以外の何ものでもないという意識を、常に確かめてゆくこと。第二は自分の個性・仕事に合わせて、根気強く、打算と圧迫をはねのけて、さきの認識の努力を続けてゆくことである。特に、打算と圧迫をはねのけねば、発展はない。この過程を通して、あることに気づくだろう。これが何かは、この努力をした人に身をもって感得されるものだと思う。この「何か」が、「総合科学」のカギを握っているのではなからうか。

これまで、「総合科学」について思っていることを書いてきたが、私は科学者が、「総合科学」が何かを求めることの重要性を強調したいと同時に、それだけで現代の問題が解決できると考えるのは誤りだということを強調したい。

過去、そして現在においてもそうなのだが、研究者の多くは、研究室の虫となり、「自分の研究が、学問が、成果をあげてゆけば、社会の人を少しでも幸福にできるのだ。」という、科学・技術の使われ方を

無視した、自分の現在の経済的・社会的位置を守るのに都合のよい発想にしがみ付いて来た。その結果、多くの科学者（もちろん少数の例外はいるのだが）は、前述のように、戦争の繰り返しと、社会の大きな不平等と、公害による生命と自然環境の破壊とを是認し、その後押しをさえしてきたのである。「総合科学」を求める人も、このような研究者になりかねないのである。

このような、旧来の科学者の態度のために、現代の問題は、猶予を許さないと同時に、深刻さを増してしまった。人間による生物の生態系の大規模な破壊、発ガン性・催奇性物質・その他有害物質の蔓延と蓄積、気候異変、極部的な酸素欠乏による人間の大量死を警告する科学者さえいる。

これを憂いだけに留めるにはどうすればよいだろう。

現在、あらゆる研究者は、研究室に閉じ込めることなく、様々な問題を解決に導く、住民・人間の生命を守る側に立った、社会的実践行動をすべきである。現在最も切実に求められているのは、10年・20年先の教育の成果によるモラルの向上ではなく、これまで教育を受けてきて、現に教育・研究に携わっている人自身のモラルによる、良心的社会的実践行動なのである。

深刻な問題をかかえる現代において、多くの研究者が、研究室の虫となってしまっていて、旧来の発想と方法を抜け出して、さきの問題に対応しようとする、良心的まともな努力を欠落させている点に、社会は批判と不信の念を強めているのである。

学生と研究者諸氏の以上の問題に対処する努力と、地表生物の永続を期待する者である。



大久野島よりの便り



※宛先 総合科学部 ソフトボール大会 殿

今、私は隠やかな瀬戸内に浮かぶ小島^{ことう}、大久野島からの帰路の船上にいます。緑色の水面に白い波を立てて走るエンジン音に揺られて、一泊二日のとても短いキャンプ生活を回顧しているのです。

私が、このキャンプに参加したのは、興味と、友人のあるフェローから誘われたからでした。時間にすれば、まる一日の島の上での生活の中に、実にいろいろなことがありました。そして、いろいろな人

と知り合いになりました。

第1日目、上陸後すぐに自分たちの住み家となるテントを立て、食事の準備を始めたのです。私はキャンプというものを経験したのは、これが初めてでした。それに今回はフェローという立場だったので、内心穏やかでなかったのです。私の心配をよそに、ハプニングがいくつかありました。しかし、それにも増して一年生との交歓が、私の曇った気持を晴ら

してくれたのです。

当夜、酒をくみかわし、大声を出して歌ったあの瞬間より、なにかしら一年生が近いものに感ぜられるようになりました。そして翌日、より一層……

「同じ釜の飯を食う」ということばがあります。我々は、これから総合科学という新しい釜の飯を食おうとしているのです。このキャンプでの出会いは一つの環の礎^{いし}となったと思います。しかしながら、全学的な規模で行なわれたこのキャンプでは充分にその環を広げ、太くすることは不可能でした。しかし、全く見知らぬ者同士が気軽に話せるようになり、確かに環の輪郭はできあがりしました。

ここである学生にバトンタッチ致します。

○ ソフトボール大会からの返信 ○

あなたからのバトン確かに受け取りました。大久野島キャンプに不参加の学生、教職員の顔もこの大会には認められました。この季節は、俗に言う「五月危機」に当り、小生はその防止剤と精神的なカンフル剂的要素であることは充分承知しています。

その為、ルールに於てチューターを必ず出すよう義務づけ、先生方も老体にムチ打って期待に応じて

下さいました。その後、各チューター・グループごとに分れて、コンパをした模様であります。キャンプ後も一年生には連帯感がみられないという声が聞かれましたが、この大会以降、その声が次第に鳴りを潜め、掲示板にもチューター・グループ集会の告知が顔をみせるようになってきました。

50年度生の間にも、環が出来つつあるとみました。その環を消さないで、49年度生、教職員にまで広げて欲しいものです。

我らの本分は科学です。この環を新しい科学に繋げねばなりません。

新しい未知な学部だけに、この環の消えることが恐ろしい。

……end

総合科学を追求する姿の背景には、「つながり」というものが不可欠である。

4コースに分かれている専門に於ても、最終的には、それぞれのコースが一つの研究を分担し、その精度を極めるのが目的ではあるまいか。つまり、従来の科学に欠けていた、横との関係をも密にすることなのである。

その為には、やはり相互認識が大切であろう。その出会いとなるキャンプとソフトボール大会という親睦会的行事の存在意義について、今回、面白い紙きれが手に渡ってきたので取り上げてみた。

ふたつ Creative Writing の正体!?

- ★ 火曜日の7・8限—ここは403号室。カジャカジャチーンとタイプを打つ音が
- ☆ する。Creative Writing とよばれる、「創作技法論演習」が坂本教官の指導
- ★ で行なわれている。ユニークな授業として学生たちの注目を集めているこの講
- ☆ 義、その目的と現状を作品の紹介と合わせて述べてもらった。

「創作技法論演習」の正体について

坂本公延

課題について少し遠まわりをして考えてみたい。若者の内部ではイメージがまるで細胞分裂の呈で増殖されている気配がある。だがこのあふれるものを捉えることばが失われては、そのイメージも幻にすぎないと私は考えている。この瞬間に在り、そして消滅していくイメージをことば化するの技術

の部類に属するといえそうだ。技術は習練によって得ることが出来る筈だ。

五月の末に東京へ出かけたとき、作家の坂上弘と二人で小説について数時間話し合った。小説と作家と読者の関係論が話題の中心だった。庄野潤三の日常的小品について私の疑問を出したとき、彼は「このような情景なり、感動は各人がいたるところで見たり、感じたりしている筈のものだが、その経験とことば化されたそれとの相異を考えてみなければならぬ」といつてから、「つまらないと感じる作品

でも、批評家なり、読者がその気になれば、いくらでも発見があるものです」と見識を示した。

ことば化されるもの、たとえば感動といったものは教えられることは出来ないとしても、若さはそれ自体で詩人を生むときえいえるのに、この稲妻よりもすばやく、花火よりもはかない感動を、ことばとして定着させようとする願望は、実は若さとは案外うらはらな関係にあるらしい。ことばの技術は少々身につけたが、決して若くはない私の内部には、もう溢れるものは見当らない。お前はいつまで生きるつもりなのだ。しかし今死ねば犬死だぞ、と自身に言ってきた近頃だが、この実感と共に、英米小説研究のとき、読者の立場からではなく、作家の視点から作品を眺めようと努力をしてきた。これを創作論と名づけてもよいだろう。いわば各作家の「創作の海図」を見出す仕事が続けてきたことで私の現実を虚構につなぐ仕方がかなり明確になってきた。感動というおぼろ気な姿がなつかしい身ぶり近づいてくるとき、ことばの投網をおぼつかない手つきで打つより仕方がない。

一昨年、フルブライン交換教授として来学したE・シュルツ女史とは互いの心を語って飽きることを知らなかったが、彼女も創ることの喜びを知っていた。彼女の大学生活は読書に明け暮れて、春が過ぎ去ることに気付かなかったそうだが、フラストレーションもうっ積していった。それを解消してくれたのが‘Creative Writing’だと語るのを聞いたとき、一昨年以来、私が試みてきた「創作技法論演習」乃至は‘Creative Writing’の意図と意味の大方を言い当てていると思った。ただ彼女のいう‘Creative Writing’は、我々ならば日本語で創られるものに相当するが、私はこれを大学での英作文として応用してきた。だから厳密に言えば、我々の場合はことばの二重操作をおこなっていることになる。本来、日本人は日本語によって思考している筈だから、この日本語での思考を英語ということばに置きかえる操作を、一瞬か数分か、数時間かけるかは別問題としても、とにかくやらねばならない。このプロセスが幸か不幸か英作文としての役割を果していることになり、これが大学の英語教育の一翼をになうことになる。

遠まわりをしたが、創作技法論演習の意図と役割の大凡の見当がついたと思われるので、もう少しこの創作論を短篇小説に限定して考えてみると、例えば自分の感動を、バラの木を接木するように、虚構の世界に

つなげる操作を考えることになる。その虚構の世界を組み上げる手続きが創作技法論だと理解してほしい。この点について、拙稿「英文の短篇小説を書いて」（『英語文学世界』英潮社1972年5月号）を参照されると大凡のところは合点がいくと思うが、それは時間論、登場人物論、更に細部を組み上げる技法を、拙作を中心にすえて分析したものだった。この演習のクラスでは、これらの点について簡単だが述べておいた。小説の創り方は一つとは限らないが、このあいだ小説家のI・マドックは「小説のプロットを徹底して仕上げから、書きはじめる」と言っていた。私はこの数学的ともいえる巧妙なプロットにむしろ疑惑を抱くという趣旨のことを彼女に話した。短篇小説の場合はマドック女史の持論に分があるが、ことばがことばを生み、ことばが感動すらをも生み出すこともあることを若い人たちにぜひ知ってもらいたい。予想もしていない美しい小世界が現出する可能性がいつも我々の眼前にある。虚構の世界を歩むことで、虚構の真実につき当ることが出来るかも知れないのだ。

なお、総合科学部生のレポートを掲載したいとのことで、やや無理をして作品を二篇選んでみた。これらは出発点に位置する作品である点を強調して、今後の力作を期待したい。この拙稿が活字になる頃には、拙作“The Dead Tree”がBBC World Serviceから放送されているだろう。というのも、もう若い私にもフラストレーションがついてまわるからである。

“A Hand-Shake”

49101082 YASUYO TSUZAKI

“Did that event really happen last night?”
Danny thought it might be a real one. But at the same time it seemed a mere event in his dream. “Two books were brought together again and talking each other about their own travels ... Should it be possible?”

It was three months ago that Danny went a secondhand bookstore near his college. He was looking around old books. Among them he found a red old book. It was a fortune-telling book printed fifty years before. Not so big and not so thick, but it had a certain kind of dignity.

From curiosity he bought that book. For a few days he looked over the book, but soon he forgot it. And it had been left in the dust on the corner of his bookshelf.

The other day his mother asked him to clean a lumber room. He found an old wooden box there. It was full of things which his grandfather had ever used — several old books and magazines, five notebooks, seven diaries, two pens and a ink pot etc.. He felt a great interest in these old books and magazines so that he carried them back into his room.

Last night Danny went to bed and just got to sleep, when he heard someone whisper. A husky voice said, "Hey you! You are a fortune-telling book printed in 19** at K. City, aren't you?" Another voice—a high, thin voice answered,

"Yes, I was printed there." The first voice was from the bookshelf, and the second from a pile of his grandfather's books on the table. He did not notice that there was the same book among his grandfather's as he bought the other day, before he heard the conversation between two books. The second voice continued,

"You are also a fortune-telling book! How have you been? It is a long time since I met you last time—for about fifty years. I never expected to see you again here! What have you been doing these fifty years?"

"Well, I'll tell you about my life. You know, I was sent to Japan with our friends. In Japan I was bought by a young man. He was born as a farmer's son. After graduation from his high school, he taught himself and mastered English and Chinese besides working in fields. After a while he entered a textile company. In a few years he could better himself by his talents and industry.

The company sent him to China to make a deal in textile. He took me there with him. I gave him an advice in order to let him succeed in his business. He followed my advice and he

succeeded in making a contraction with them. Of course more because of his efforts than my advice. When the deal was concluded and I saw him shake hands with Chinese merchants, I felt a great deal of happiness.

For twenty years he treated me very well, so I tried to help him as possible. But on the eighth visit to China, in Shanghai he had his baggage stolen, in which I was. So we parted for ever. I was sold from one man to the other for ten years. Once I belonged to Russian Emperor and a great Persian magician. During these periods I saw many a scene of a hand-shake. To me a hand-shake seemed to help people to become more friendly.

Twenty years ago a sailor took me back to the U. S. A. and after travelling through the whole America I was bought by a secondhand bookseller last year. One afternoon about three months ago, I was bought by a young man and now I am here."

"What a wonderful trip you have made! Well, I was also bought by a young man fifty years ago. But I could not help him many times. I have been..."

A drowsiness came over Danny.

Next morning Danny woke up and looked around. His room, however, remained as it had been. He said to himself, "A hand-shake..... a hand-shake..." It was a sunny morning.

"Still Falls the Rain"

49101104 KAYOKO HAYASHI

The bell rang all over the school and then the lessons of that day were over. The students went out of the school gate, merrily chattering each other. Ketty also came out of the gate in a small group of her friends. All of them exchanged greetings.

"Good-by! I must hurry!"

"Where are you going in such a hurry, Ketty?"

"I'm going to my grandparents' house. I want to catch the 3:35 train. I have only ten minutes

before the train starts! Good-by!" said she, and ran along the street.

It takes two hours to her grandparents' by train. The place where her grandparents lived was a dear place for her. For she lived there till the age of ten, and there she was brought up surrounded by beautiful nature. Now she was sixteen years old.

The sky was covered with the gray clouds. It was threatening to rain. Though it was 3 o'clock, it was dark as if it were evening. She ran and ran to the station and could only just catch the train. She sat down by the window, still out of breath. There were not many passengers in the carriage. When the train started, at last it began to rain. It fell stronger, and stroke the window through which she was looking. Listening to the sound of the rain, she was watching out of the window absent-mindedly.

Before long, she felt sleepy and she went into the land of dream. Now she was entirely in the land of it.

—She was a girl at the age of ten. And there was her mother who had left this world several years ago. Kitty and her mother were sitting at the kitchen table and talking cheerfully. It had been raining as it was now. The red and yellow roses in full bloom got wet in the rain. Kitty went on talking about her school and friends. While her mother listened to what Kitty was talking earnestly. When Kitty sang, her mother also did to her song. And then they laughed merrily. The rain was still falling.—

After a while a whistle of the train made her awake from the dream and she came to herself. She looked out of the window again, and still it was raining. She watched the rain with a sad look this time. The train reminded her of her mother. Suddenly her heart was full of mother's reminiscence, and tears rolled down on her cheeks.

She murmured, "My mother was gone! But still falls the rain—without any change!"

受講生の話：坂本先生から「まだイイ作品が現われないねえ。」と、手厳しい評価をうけている学生たちはどう受け止めているのだろうか。受講の動機はというと、「タイプライターの練習が楽しみで…。」とか、「50年度からのカリキュラム変更に合わせて。」「“創作”というのが創造的学部＝総合科学部にマッチしてる感じで…。」授業自体に対しては、「テーマによっては指示されるとやりにくいものがある。それに2週間に1作品を仕上げるのはキツイ。」「難しい。エッセイのようなカルイところから始めて欲しかった。」「作品のレポートを提出するだけでなく、技法についての講義もして欲しい。」学生が反省を促された意見としては、「もっと小説に親しまなくちゃと思った。」「一人前に扱ってくれるのがいい。でもそのために、本当に実力をつけなくては。」ふうふう言いつつもフィーリングにおいては好感をもっているよう。「他の講義と違い、学生が“参加”している感じがいい。」が総評か。



初めてのバース・デイ

2年生は地域文化・社会文化・情報行動科学・環境科学の4コースに別れた。各コースに研究室が設けられているが、似た志を持つ者が集って、今どんな話が学部やコースの将来について語られ、どんなふうに学生が動いているか、そのあたりを報告してもらった。

地域文化コース・研究室

我誇り高き地域文化コース その研究室は一体どんな役を演じているのかしら? 「カチャ」「ボタン」 入ってくる足元に一瞬目はそちらへ向かう。「ヨオー」「オッス」 今、正に研究室はオアシスの存在だ。人は何故集まるのであろうか。何故? 「こんにちは」「やあー」の挨拶の中に、たわいなお喋りの中に憩い・安らぎを覚える。人との接触なくしては生きていられないのが私達である。ここ研究室での2・3人の語らい、4・5人の討論の中で彼らは何を憩い煩っているのでしょうか。背のびして、遠くを見つめようとしている私達、自分一人ではどうしょうもなく、人の意見に耳を傾け、何とか流れに乗ろうとしているのです。流され易い現代に、何とか流されずにすることが肝心なのじゃないかしら。時—1975年×月×日(夕方)

場所—地域文化研究室

一人の男、そう彼をA氏と名付けよう、そのA氏が誰もいなくなったこの部屋で、独り、自分の内部に向かって色々と思案している。口は無意識の内に無声の言葉を発し、組んだ腕は固定している。机があまりに広々としているため、彼は身体を少し離して、見えない圧迫感から一定の距離を置いている。机の上の赤いカーネーションは、しおれたままである。即ち、「生」は彼のみである。A氏はもう充分、疲れきっているといってもよかろう。色々な事がありすぎたし、また昨日は、ブランデーをストレートで六杯ものんだからである。彼は目の前のしおれたカーネーションに目をやる。彼は、すでに「生」を終えたその物体を直観して、その花が、つい先日まで保っていた“美”について考えをおよぼせる。彼は、自分自身を讀者として語りかけるように想起し始める……。

美について語ろうとする時、私は、或る種の戸惑いと躊躇いを感じる。何故なら、美について語ることは、私の全く純粋な、主観的な感覚—知覚とは区別された感覚—を通して、どうしても、美という言葉に冠せざるを得ないような、私の内的な精神の状態を語ることに外ならないからである。

私は、美を見出しそうとは思わないし、また美に至ろうとも思わない。何故なら、美という観念的な言葉から発して、生み出された美は、決して真の意味での美ではあり得ないからである。そのような美は、現実からは全く遊離した、単なる思弁上の美でしかない。美は、美からは、生まれない。

私が、美について語る時には、自己の内部に於いて、美という言葉でしか言い表わすことが出来ないような実体の把握が為されていることが、絶対に必要なのである。そして、その状態に至って、初めて、私は、自己の内的な状態を、美という言葉に託して、表現するのである。これ以外、私にとって、美の誕生する時は、あり得ない。

ところで、美を直接的に把握する際の、私の感覚は、全く、私だけのものであり、純粋に私という主観の中に包み込まれたものであるということが、根底にある。そして、そうした、純粋な主観の世界に、客観的な普遍性を付与するものが、言葉であろう。それは、主観的個別的な現実の世界と、客観的普遍的な観念の世界との交差点とも言える。そして、現実の世界と、観念の世界とを、結び付けるところに、私の精神というものの存在があり、そして、生きるということの真の意味が、ある。

私たちは、全てに於いて、つくられた、出来上がった言葉を用いることのみ囚われずに、自己という単独な個別者が成立することのできる立脚地を、自らの内部に見出し、築き上げ、そしてそれを全ての中心に置こうとしなければならないであろう。自己の生きている現実の世界に関わりを持たない言葉を、私は、出来得る限り、排除していきたい。そして、その際、最も必要なのは、ただ“沈黙”に於いて、私自身を相手とし、その熟してゆく過程を見つめるということである。そして、その時にこそ、私は、真に生きるということの意味を知るのであろう。

そして、そこに何が、生まれてくるかを、私は、じっと見つめてゆきたい。

美について語ろうとしながら、私は、あまりに回りくどく語りすぎたかもしれない。

——彼は、ここで美について語ろうとしながら、美という観念への懐疑に陥入ったともいえる。彼は今、大前提をも疑った。しかし彼は、“美”を考えるうちに、それと常に関わりをもっているもの、“生”について考えざるを得なくなってきたのである。そして彼は、静かに“真に生きる”事を自分に問い正すのである。さて、彼—A氏は、先々日の事を頭にうかべ、自分の今、熟考している“美”と“生”との関わりあいの中で再び語る……時—1975年×月(×—2)日(同じく夕方)

場所—A氏の六畳の下宿

黄昏に包まれた部屋の薄暗がりのなかで、今は、私はペンを握っている。硝子窓に縁どりされた空間には、西に傾いた陽の光りを受けて、薄紅色に染った壁面が見える。そして、そこに並ぶ、夕陽を吸い込んだ、いくつもの窓。この部屋の中には、机の上に、わずかばかりの静寂を投げかけている白い花がある。そして、それを包み込んでしまうかのように、重く立ち並んでいる書物。ここには、もはや、無感覚な無表情な、客観的な世界は存在しない。ここに、私は、対象的範疇でも、客観的对象界でもない、私に直接的に関わりあう、交渉的現実界を、いや、むしろ私そのものを、私が生きるということを、そして、そのこと以外には、何も存在しはしないということを、あまりにも大きな驚きのなかに、感じる。そしてそうした胸に押し寄せてくる、とめどもない驚きにひたりながら、今、私は、この胸の内的な精神の状態を、美という一つの言葉によって名付けたい。しかしこの今、胸いっぱいにあふれてくるものを、どうして私が正確に語る事ができよう。私は、ただ硝子窓越しに流れ込んでくる夕陽のなかを、無心に沈黙へとなびいてゆく煙草の白い煙を、じっと見つめているだけである。

そう今や、彼は、“現実”が全ての観念に先行していることを悟る。現実に対して言語は無力でしかない。いや、むしろこっけいにさえ見える。“美”は確かに人間の創りあげた観念かもしれない。しかし、人間が自然の中に発見した、最もすばらしい、“観念”と言えるであろう。人が直観的に“美”と

感じたこと(たとえそれが全くの主観であっても)が、とりもなおさず“美”と呼ばれてさしつかえのないではなかろうかと思う。学問は“体系化すること”である。哲学においてもまた美学においても、そして心理学においても、その他諸々の学問においても……。人間は、知りたい、体系化したい、分析したいという志向のもとに研究し、書を読む。しかし、人は自然の中で、の自分に立ち帰った時、何の分析も、体系化も必要としないまさしく“自然のあるがままの姿”を発見するのである。深紅に照り輝く太陽の下で、我々の創りあげた文明はなんとちっぽけで、こっけいなものになってしまうことか……。

社会文化コース・研究室

校門を潜り乍らこう考えた。医に進むには金が必要。既存理系は公害が怖い。既存文系は就職難。兎角に他学部は進みにくい。進みにくさが高じると、安い学部へ転学したくなる。そこで総合科学部に気が付き、社会文化に進もうと思う……。

社文の研究室の位置は、大講義室に隣接する簡易建築物——世間ではプレハブとか呼んでいるらしい——の二階なのです。隣の部屋に、学生相談室が移された事に対して、何と我々を理解し、手廻しの好い事だろうかとの悲観論?もあるのです。あの狭い部屋に、二十五名からの学生が入るのです。従って早い者勝ちで残りは涙をのんで……。社会文化悲話でした。兎に角、雰囲気の愉快な事は学部一、と自惚れて居るのですが、決して安易に流れて居る訳ではありません。チェスやオセロを戦うにしても、それは即ち、山田教官御教授の現代戦略論の応用であり、学問的に高度な技術を磨いているのです——力学、特に反発弾性や確率論に秀でた人も居るらしいが——。まだ産声をあげた許りで設備不十分は否めませんが、今後徐々に拡充し、蔵書数では学部随一を誇る可く努力します。

将来歴史家達は次の様な言葉を残すでしょう。「日本の知的革命、此処^{より}自り発す」と。現代世界は、資本を中心に回って居ますが、今後少なくとも知的分野だけは、その軌道を修正して、総合科学部を中心に成る事は、火を見るより明らかです。

少し洒落が大仰に成り過ぎました。ここで社会文化コースの舞台裏を綴らねばならないでしょう。

まず、此のコースでは、社会構造及び技術開発研究を主に行います。主に、と言うのは、各人の希望

と努力によって、さらに拡げ得るからです。他のコースと比較すれば、群の数が少ない様ですが、群は便宜的な——各コースも同様ですが——ものとして促えた方が好いと思われまゝ。社会構造論を中心とする第Ⅰ群では、何をやるかが未だ定まっていない点で、将来の見通しは少し明確さに欠けますが、それ故に各人の希望が大きく反影されると言っても過言ではないでしょう。今だから言えるのですが、社会文化コースから司法試験合格を目指すのだと言う御人も存在するのです。結局、政治学・社会学・文化人類学及び法学等を主体とした新しい学問体系の確立を目指すのではないかと思います。

次に技術・開発論を中心とする第Ⅱ群は、第Ⅰ群に比して割合にはっきりしています。現代日本で遅れている技術系の学問、そして問題に成っている開発問題を、具体的に研究するからです。最近、「人間—科学—技術」と題する本が出版されましたが、これは、我々のコースの諸先生が一丸と成って翻訳された本で、此処にも此のコースの結束の強さを示しています。この本の中でも述べられていますが、Ⅰ群、Ⅱ群共に、日本の社会学系の学問としては非常にユニークで、専門に研究しているのは、総合科学部社会文化コースだけなのです。

此処で宣伝を一席。社会文化コースは、やる気のある方には、非常に面白いコースだと思います。開拓精神に富んだ人どうぞいらっしゃい。特に女性の方々に言いたい。総合科学部を選んだ限りは、学問を即実生活に応用出来得る思考力を養う為、社会文化コースを御勧め致します。環境抜群交通便利食堂隣接校門徒歩三分ガス水道付。

さて、現在二年次生の総数は二十五名である事は前に述べましたが、これは、コース定員が三十名であることから考えますと、人気のあるコースだと思います——ただ、人気をニキと読むかヒトケと読むかは不明です——。しかし、未だ出来た許りの研究室を、我々学生は教官の方々と共に、より好き研究・学習の場として行こうと意気盛んです。

歴史や政治は、夜作られると申しますが、学問は講義室の中で作られているのではないことは明らかです。従って毎日真面目に出席して、ノートを取り、下宿へ帰って予習・復習をやって……、と言う高校生型の秀才に学問は出来ないでしょう。と云って、講義をさぼる事を勧める訳ではないのですが、教室や教官室で拾って来た学問の種を自分で育てる態度

が必要なのです。

漢文の素養は有りませんが、学問を、学ヲ問フ、ではなくて、問フヲ学ブ、と読むのだと言いたい。問フヲ学ブ態度を身につけた人間に成るには、社会文化コースが一番である。

現代社会に疑問を感じない人は居ないと思うが、疑問に対処する能力に長けた人は未だに少ない。要するに知識は豊富だが、思考力の足りない人が多いことに原因すると思われる。諸君、社会文化コースで、真に考える人間に成ろうではないか。

補遺………社会文化悲話続き。本と嫁さんだけ有れば佳いと言ってみたものの、本数は増えても、嫁の来手が無い。仕方無いから辞典枕に全集敷いてジャーナル被って寝よ。

情報行動科学コース・研究室

「情報」とは、そもそも何であるか。まあ、ナサケにムクいることではなさそうだが、これがなかなか意味が広くて難しい。莫とした答でよければ、「自分にとって、有意味なものすべて」ということになろうか。又、現代風に言うと、「ある系によって受容、伝送されるあらゆるデータ、又その内部で処理されるデータ」なのだそうだ。

では、「行動」とは何か。勿論、何らかのことを行なうという意味に違いはないのだが、究極のところでは、生命もしくは生命体を指しているように思われる。

となると、「情報行動」とはどういうことになるか。「情報行動科学」とはいかなる学問か。と聞かれても、これは一段と難しい。困った。わからない時は、先生に尋ねるのがよい。お優しい先生ばかりだから、1時間でも2時間でも、とうとうと話して下さるに違いない。

しかし、この訳のわからない多変量データを線型化して、誤差を無視し、その平均をとったものを、独断と偏見をもって自分なりに解釈すると、実に莫然と「人間」「人間と生命」もしくは「生命のある機械」に関する学問という気がする。勿論、在りと在らざる学問は、つまるところ「人間—その不可解なるもの」の究明に他ならないわけだが、ここではそれを、機械論的立場からでもなく、生氣論的立場からでもなく、むしろその両者の接点から追究しようとしているわけで、それ故、ノーバート・ウィーナーおじさんの言う、心理学・生理学・物理学などを

総合した「サイバネティックス」とやらが、大きな問題となってくるらしい。(このサイバネティックスについては勉強不足のため、ここでは触れない)

このわけのわからない学問をやろうというのが、我が情報行動科学コース(スパイ秘密養成科と間違われそうな名前であるが)で、ご存じの通り3群に分かれている。その内訳は、今のところ、数理十勇士、生体五人組、心理七人衆の計22名の強者ども(うち女性6名)である。しかし、今までのところは、まだ、さほどはっきりした区別はついていないし、総合科学部の主旨からいっても、無理に色分けする必要も無いと思われる。

以上の学生が、学内での行動の起点としているのが、旧プレハブに宿貸りしている情報行動科学研究室である。一応一人に一つずつロッカーと机が配備されていて、申し分ないと言いたいところだが、ないと言えば嘘になる。かといって文句を言っても、事情がなかなか許さないらしいから仕様がなない。いままら文句など言うまい、言うまい。

さて、この研究室の中では、雑談に花咲かせる者あり、辞書片手に頭をひねる者あり、切間近なレポート作成に必死な者がいるかと思えば、悠々と読書に親しんでいる者もある。罵声をあびせる者、笑いこぼる者、すやすやとお昼寝の者、物思いに沈む者等、ありとあらゆる姿が見られて、そういう点では一年生の部屋と何ら変わりはない。しかし、コース別の研究室ともなると、やはり少し違ってくるものだ。研究室と名のついている以上、専門分野に関する勉強会やゼミ、各方面の討論がしばしば開かれているのは当然というべきだろう。又、今後そのような事にこの研究室が広く活用される機会は、増々多くなってゆくことが想像できるし、又そうなって欲しいものだ。ただ、この研究室は、あくまで学生のための部屋であるから、変に堅苦しくなく、今のまま和やかな雰囲気であることを望む。

最後に、このコースの将来はいかなるものになるのか。又、どうあるべきかを述べねばならないだろう。

幾度も聞かされてきたことではあるが、総合科学部自体も、我が情報行動科学コースも、まだ、歩み始めたばかりで、自らの手で自らの道を切り開いて行かねばならない。従って将来、一体どれだけの力が発揮できるようになるのか、さっぱり見当がつかない。しかし、望むらくは、既存する学部とは、どこか一味違う考え方に立ち、研究の未開発な分野の

パイオニアとしての役割を果たすようになりたいものだ。そして、この未開発な分野を開拓することによって、既存の学部になにか新鮮な思想を吹き込むことができれば、それで充分だと思う。

学部の中でも、我がコースは何とも不思議な位置にある。すなわち、文科系か理科系かと聞かれた場合、実はその中間に位置するからである。情報数学あり、情報生体あり、行動心理あり、というふうに、区別し難いのである。しかし、情報行動的考えであらゆる事を解明して行こうと試みるならば、これは必然的な結果ではなからうか。

ある一つの事を解明しようとするとき、唯一つの方向のみから検討するのではなく、できるだけ多くの方向から共同して検討してゆく、この考え方が我が学部の意図であり、この考え方に基いて、まず手始めとして我がコースは、3つの分野から解明を試みようというのである。従って、いかに情報行動科学コースといえども、3つの群が互いに協力し合って、新しい分野を開拓してゆかなければ、結局は既存の学部とたいして変わりのないものになるだろう。

そのため、今の段階としては、各群に知識を集結することが必要となる。それが、ある程度まで達した時、初めて3つの群が手を組んで新しい分野を開拓してゆけるのであろう。

とにかく、今までより少し広い視野で一つの事を見つめてゆくことこそ、我がコースの神髄であろう。つまり今までに見落とされていた事実を取り上げる役目を背負っているのである。ただ、これだけの力を持つようになるのに、何年かかるか見当がつかないし、果してそれを成し得るかという不安がないわけではない。しかし、これを成し遂げなければ、我が学部創立の意図は反映されたことにならないのではなからうか。

環境科学コース・研究室

いつぞや坂本九が、「太陽と水と土と」という歌を歌っていた。大声で歌ってみると本当にいい気持ち。みんな自然が好きなんだね。人格は環境に左右される—どんな環境を創ろうかなあ……。当コースは現在総勢17名と最少数派である。しかしながら、この知的白痴集団?の実力たるや驚異的である。研究室は旧自然棟の5Fに「半隔離的」にあって風通し抜群。三方に窓があって、それでもってドアが

開いているという、無用心、いや超開放的である。部屋の中を見渡しても殺風景と言わざるをえないのはナンニモナイからのダ。変わったものといえば灰皿がわりの空カンとオペラグラスぐらい。本棚に本はなく（これは研究室の非安全性にあるが）、そのため「環境科学コース生の図書を、」と専門・非専門の図書充実を望む声が圧倒的に高い。ま、少しずつ教授会にお願いをばいたしまして、いうなれば“環境”をよくしていく所存である。しかし、“環境”というものはそこに住む民によるものらしく、外見と比較するのは天子様並みに畏れおおいくらい、中味（コレは頭脳を言ってるツモリなのだが……）はイイという、もっぱら身内での噂である。これら噂の男たちは実験で一緒になるせいか、意外に和気あいあいとしている。もちろん「流れに任せる」的なデラシネ要素は誰もが持つところである。現代的な若者要素が環境科学コースのメンバーにもある。でもそれだけじゃない。ソフトボール大会に続き、現在は六月祭におけるバザーの企画も準備中である。

チマタで耳にすることには、不思議に環境は人気がないということである。そこでキザっぽくPRしてみよう。……しかし、困るんだわあ、ウチラ。後で述べるような問題も多いし……でも決して魅力のないものではないと言っておこう。現状は口で述べるより見に来てもらいたい。コースも離れて誰でも気軽にさあ。開放的な研究室であるし、気さくなヤロウたちばかりである。話し合うことによっていろんな視点から事物を見ることが可能になるじゃない。ちょっとした気まぐれでやってきたことが、あなたに新鮮な転機をもたらすことを希望します（ワイ、言ってやった、でもホンネだよ）。そうそう、特に女性諸君に言っておきたいんだけど、新入生の環境創造への意欲的な参加、待ってるよ。

環境科学研究室の横には、理学部と対峙したちっちゃな屋上と、他の3コースの研究室を見下せる（ミオロせるのであって、ミクダせるではありません。他意のないことを表明します；マジメな顔にて）大きな屋上とがある。これらにて我々は思索に疲れた頭を休めるのである。何？上からボールなんか落ちてきたって、そりゃアンタ、冗談でしょうが……。

さて、調子は変わって、以下環境科学コースの総合性の問題、及び、“環境”の問題について考えるところを若干述べさせていただきます。

環境科学コースは、周知のように4群に分かれて

いる。1群＝数理科学を主とするもの（数学）、2群＝物質科学を主とするもの（物理、化学）、3群＝生物環境を主とするもの（化学、生物）、4群＝地域環境を主とするもの（地学、地理）である。勿論；こういった群分けは便宜的なものであるとってよいと思う。従って学生は、各自の興味をもつ分野を自由に選ぶことができるわけだが、中には「群分けなど、総合科学部の理念に反する。」という声に示されるよう、自由コースを望む者もいるようだ。しかしながら、こういった志向は、環境科学コースすべての分野にわたっては困難なように思う。従来の個別科学（数学、物理、化学、生物、地質）を離れて、どれもこれも平面的にorganizeしたのでは、こういった個別科学1つを取っても、4年間で、その基礎的段階を出ないほどに高度に体系化され、分化されていることを考えると、初歩の域を出ないで、大学を終るかも知れないからだ。従って学生は、自分の最も適した1つの分野を中心に、その関連領域を学習するのが最もやり易い、妥当な道であろう。実際、環境科学実験等にみられるように、物理、化学、生物、地学という風に、従来の個別科学への分化が行なわれています。従って指導者側から、数学系、物理系、化学系、生物系、地学系という区分が、一応なされるように受取る。特定の分野をやりたいが、他はどうも気がすまないという学生には、納得が行くかも知れないが、何か裏切られたという気持ちがないでもない。それは、環境科学コースにとって、総合科学部が掲げている総合科学がありうるか、少なくとも総合性はありうるかという問題に触れるからである。ここで、環境科学コースにとっての総合性の問題を考えてみたいと思う。まず、環境科学コース内、即ち、自然科学内での総合性について、次にその枠を超えた、人文、社会科学を含めた（具体的には、コースを超えた）総合性について分けて扱おう。

まず、前者から始める。総合性の問題については、環境科学コース全体にわたって、統一した見解を見出すことは難しい。即ち、1・2群の数学、物理等は、個別科学への志向が強く、3・4群の生物、化学、地学等は、個別科学への志向も持つと同時に、後に示すような意味での環境、即ち、生物環境、地域環境といった広範な領域を対象とするため、総合性への志向もありうるということだ。この違いは、前者が抽象性の高い研究、あるいは、物質内部構造

の解明といったものに対し、後者は、具体的なもの、現実的なものを対象とするという、学問の性格の違いからくるものと解釈するのは誤りだろうか。さて、個別科学へ志向すると言いましたが、これはいったい何を意味するだろうか。これは、学生が、1つの学問（例えば、生物学）を主軸に、関連領域を学習することに他ならない。こうなると理学部と同じではないかという疑問が出る。理学部と同様に、個別科学を志向するにもかかわらず、1つの個別科学を取り出すと、カリキュラムの上では、理学部と比べ、より基礎的なものしかできない。「専門科目の充実を」や「大学院の準備段階としてだけでなく、四年間で完成度の高いものに」などの声は、そこから来るように思う。「ここには総合科学は見られぬではないか、しかも、個別科学それ自体では完成度の低いものではないか」という矛盾が先程の「裏切られた」という心理に結びつくように思う。ならば、我々は、悲観的にならざるを得ないのであろうか？…否、環境科学コースは、こういった危険性を持つと同時に、総合科学部の独自性を持っているのではないだろうか。理学部においては、1つの個別学問が専門化して、他の関連分野をする余裕がないといえるが、環境科学コースでは、関連分野を十分、自由にする機会が与えられている。このため、先の矛盾をおこすことになる。従って学生は、ある1つの個別科学をやることもできると共に、他の関連学問を自由に、有機的にオーガナイズできる可能性をもつ。こういった学生の自主的な、諸学問間の有機的オーガナイズは、即ち総合性は、どの群でも志向しうる可能性はもつ（現実的には困難を伴うことは言うまでもない）が、体制として、学生へ指導的な、群としての総合性は、3・4群のみにありうるように思う。

次に自然科学の領域を超えた、広い意味での総合性について述べよう。自然科学内だけの学問の総合化が困難なのに、どうして、人文、社会科学との学問の総合性がありうるかと問われるかも知れないが、むしろ、自然科学に属さないから可能なかも知れない。なぜなら、自然科学をするものにとって、自然科学は、専門となるが、人文、社会の分野は専門ではないのだから、その総合性とは、一般教養の意味が強い。しかしながら、一般教育とは、授業科目のそれではなく、自然科学を志す者の社会や人間に対する正しい認識であって、これこそ、真の教養で

あり、たいせつなことであると思う。そして、この意味での総合性は、総合科学部で十分、ありうると思われる。

これまで、1つの個別科学に重点を置いて、関連分野を十分やるという考えをして来ましたが、学生が自分の専攻する学問を自由に選べるかという、総合科学部の独自性があるということから、2・3の分野を平行してやるということも可能だろう、一見、無駄な様な多くの分野をやって見ることも、成果をおさめるかも知れません。ただ、より困難だろうとは思ふ。

次に環境問題に触れなければならないと思う。環境科学コース以外の人、特に1年生に言っておきたいのだが、世間一般では、「環境」の名から環境科学コースは、「公害問題など現代はやりの環境問題の処理、後始末をするところだ。」などという誤解がされるのではないだろうか。こういった意味での環境問題を解決するために、総合科学部環境科学コースができたと思う必要は全くないことだと思う。もし、本コースが一丸となってこういった意味での環境問題を扱ったとしたら、4年後には、公害処理技術者といった、世の誰かさんのための人間の製造へ危険性を有するであろうし、総合科学部が第二の筑波と疑われざるを得ないであろう。そうした、即物的な、限定された志向をしなかったことは、学問の自由を侵されず、総合科学部の発展へ可能性が少くとも保てたことであり幸いなことと思う。環境科学コースは、むしろ、純粋な学問追究の権利を有していると思う。従って、環境科学コースで扱う「環境」とは、人類の生存する自然界の、基礎的、体系的な把握であり、学問的に扱うものである（筆者の表現が悪いから誤解をまねくかも知れないが）。そして、こういった意味における環境問題も、環境科学コースの全てが対象として、扱うわけではなく、3・4群のみ、「生物環境」「地域環境」の研究と題されているように、こういった意味での環境問題を志向しうる可能性があると思う。もちろん生物とか化学、地学といった個別科学の追究の志向もあるということは、先に述べたところです。1・2群の数学、物理といった学問が、環境といったものに直接結びつかないため、こちらは、個別科学への志向が強いといえる。そして、3・4群が、上述の意味での環境問題を扱うとすれば、さきほど述べた、体制として、学生へ指導的な総合性（学生の自主的な、

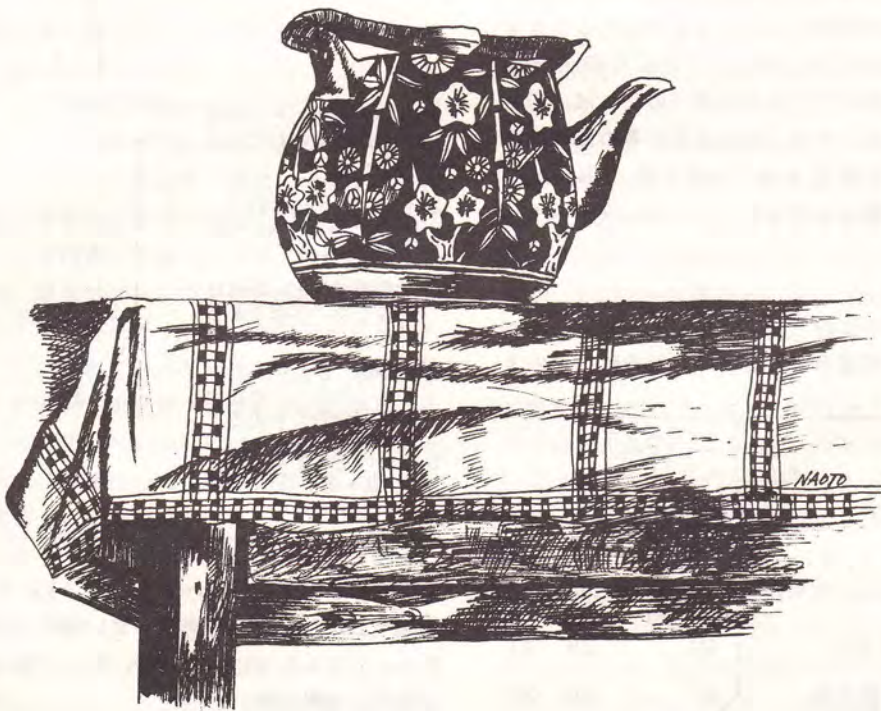
各領域の総合性だけでなく)志向する可能性が、カリキュラム上から、大きいといえると思う。

このように、環境科学コースに総合科学が存在するか、少なくとも、総合性はありうるかというとき、環境科学コースの全体にわたって一面的に把えることはできないように思う。即ち、環境科学コースでの総合性はどうか、すべてにありうるのか、一部に可能なかということ、及び、環境とはいかなる意味であり、それを対象とするのはどの分野かということをはっきりさせる必要があると思う。このことは、常識で判断できるかもしれませんが、受験生、及び、新入生に対して説明する必要があると思う。ここで今までのことをまとめてみる。図式しなかったのだが、最も説明に適切な図を思いつかなかったので、言葉でまとめてみる。

実際の方法として、各個別学問への志向がとられているということ。しかしながら、カリキュラムでは1つ個別学問は基礎的であるということ。(これは学生が、教官とともにある程度、補える)。そして、それは、学生の自主的な、他分野の有機的オーガナイズ、即ち、自主的(体制として、学問の総合化への指導をしないこと。誤解のないよう断わってお

くが、学生が教官の研究室を訪ずれるなら、教官は喜んで応じて下さることはいうまでもない。)総合化のための時間的空白から来るものであり、すべての群が、その自主的総合性の可能性をもつ。そして、これは、自然科学を超えた意味での総合性についてもいえる。そして、体制として指導的な総合性もちうるのも、前に述べた意味での環境問題をとり扱うとすれば、ともに3・4群であり、1・2群は、群としてより、個別科学、数学、物理といった感が強い。以上であるが、1・2群が個別科学への志向が強いからと言って、その存在を否定するものではなく、総合科学部でも、純粋な自然科学の個別科学を、他の分野を学びつつ、追究できることは、意味あることだと思う。

最後に、多くの学生の意見を取り入れつつも、筆者の独断に走ったかも知れない。あるいは、特にとりたてる必要のない自明のことを言っているのかも知れない。しかし、環境科学コースへ関心ある1年生、及び、教官方々に、我々2年の学生の意見が、(もちろん反対の意見もあるが)少しでも参考になればと思う次第です。お気づきの点は、ご指摘下さるようお願いいたします。(M.K)



50年度新入学生調査報告

学 生 相 談 室

学生相談室では、総合科学部生の入学動機、進路への志望等を明らかにするため、昨年度に引き続き「新入学生調査」を実施した。

質問紙は昨年度とまったく同じ、B5版3ページ、無記名式、6問。実施したのは、入学直後の4月12日(土)。

その集計結果の概要は、以下の通りである。

学生相談室 (担当 岩村 聡)

回答者数と回収率

| | 男 | 女 | 計 ※ |
|-------|-----------|-----------|------------|
| 回答者数 | 72 (92.3) | 38 (98.5) | 111 (92.5) |
| 在籍学生数 | 78 | 42 | 120 |

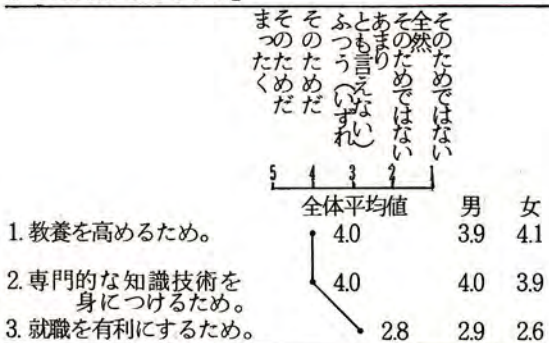
(※合計欄には、性別不明のもの1名を含む。以下同じ。)

総合科学部入学者数、回収率等は昨年度と大差ないが、女子学生が大幅にふえたことを見落してはならない(昨年度16名13.2%,今年度42名35.0%)。

因みに、学務係及び学生部の調べによれば、総合科学部合格者においては、広島県出身者の比率は高まっている(昨年度19.5%,今年度27.9%)が、現役合格者の比率はあまり変わっていない(65.4%→64.3%)。

問1 大学進学目的

「あなたが大学に進学することにしたのは、どのような目的からですか。」

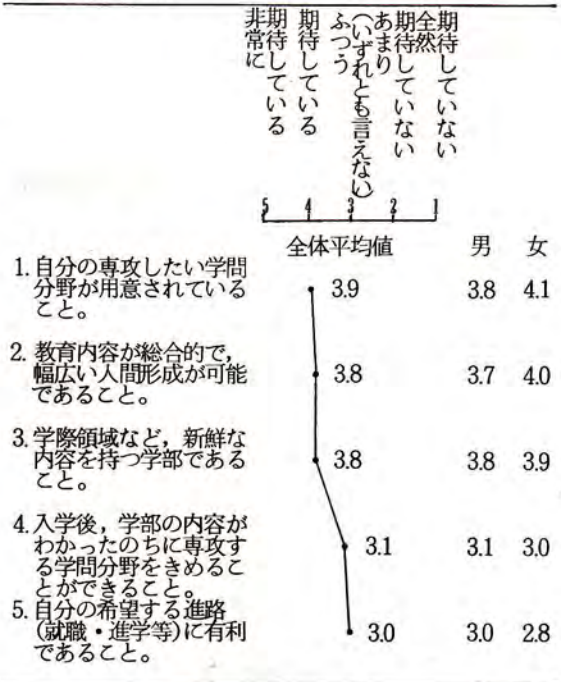


昨年度全体平均値は、上から3.9, 3.6, 2.7であった。いずれかと言えば、「専門型」学生が多くなった印象を受ける。

なお、「その他」欄への自由記述には、「自己を見つめるため」、「友達を得るため」、「何んとなく進学すべきものと思ったから」、「独立精神を養うため」などが含まれている。

問2 総合科学部への期待

「あなたは、広島大学総合科学部のどんな点に期待していますか。」



昨年度全体平均値は、上から、3.4, 3.7, 3.5, 3.0, 2.8であった。「専攻したい学問分野」へのチェックがふえていることは、問1や問3の結果とも関連して興味深い。

問3 大学院への進学

「あなたは、将来、大学院へ進学する希望を持っていますか。」

| | 男 | 女 | 計 |
|----------------|-----------|-----------|-----------|
| 1. はい。 | 33 (45.8) | 13 (34.2) | 47 (42.3) |
| 2. いいえ。 | 7 (9.7) | 6 (15.8) | 13 (11.7) |
| 3. まだよく考えていない。 | 32 (44.4) | 19 (50.0) | 51 (45.9) |
| 計 | 72 (100) | 38 (100) | 111 (100) |

昨年度、「はい」と答えたものは、男子49名(55.1%)、女子6名(40.0%)、計57名(52.8%)であった。今年度は、男女ともやや減少している印象を受ける。

問4 研究したい学問分野

「あなたは、大学(大学院を含む)でどのような学問分野を研究したいと思っていますか。」

- A 人文科学 男26, 女34, 計60 (61.9%)
- 01 文学関係 計14 { 英米文学・語学4ほか
 - 02 史学関係 4
 - 03 哲学関係 12 { 心理学8, 哲学2ほか
 - 04 その他 30 { 地域研究(地域文化)7, 日本研究5, アジア研究3, 比較文化(研究)3ほか
- B 社会科学 男21, 女5, 計26 (26.8%)
- 07 法学政治学関係 3
 - 08 商学経済学関係 3 { 経済学3
 - 09 社会学関係 7 { 社会学3, 文化人類学2ほか
 - 10 その他 13 { 社会科学(社会文化)5, (人間)行動科学3, 社会構造研究3ほか
- C 理学 男27, 女11, 計39 (40.2%)
- 16 生物学関係 6 { 生物情報学3ほか
 - 17 地学関係 5 { 地球科学2ほか
 - 19 その他 28 { 環境(科学)11, 自然(科学)6, 情報行動(科学)7ほか
- D 工学 男2, 女2, 計4 (4.1%)
- 35 その他 4 { プログラミング2ほか
- I 教育 男1, 女2, 計3 (3.0%)
- 69 教育学関係 3

K その他 男3, 女1, 計4 (4.1%)

| | 男 | 女 | 計 |
|--------------------|-----------|-----------|-------------|
| のべ有効回答数 | 80 | 55 | 136 (140.2) |
| 有効回答者数 | 60 (83.3) | 36 (94.7) | 97 (87.4) |
| 「まだよく考えていない」無回答の合計 | 12 (16.7) | 2 (5.3) | 14 (12.6) |
| N (回収数) | 72 (100) | 38 (100) | 111 (100) |

この設問は、必ずしも専攻分野への希望を尋ねているわけではないので、この結果からただちに、コース、群等の希望者数を推測することはできない。

数は少ないが、より具体的でややユニークな回答としては、「東ヨーロッパ・西アジア地域研究」「情報と人間行動の関係」「気象学」などが挙げられる。

参考までに、昨年度は、人文41(56.2%)、社会34(46.6%)、理学(環境を含む)26(35.6%)、その他となっていた。今年度は、女子学生がふえたためか、文学、心理学、情報行動科学関係の記述がふえている印象を受ける。

なお、回答数に付したパーセンテージは、有効回答者数に対する比率。のべ有効回答数は、「まだよく考えていない」等を除く有効回答数の合計。回答者によっては、複数の学問名を記入しているものもあることに注意されたい。

問5 希望する職業

「あなたは、大学(大学院を含む)卒業後、どのような職につきたいと思っていますか。」

| | 男 | 女 | 計 |
|--------------------|-----------|-----------|------------|
| 1. 技術者 | 4 | 0 | 4 (5.7) |
| 2. 教員・研究者 | 20 | 5 | 26 (37.1) |
| 3. 記者等 | 10 | 2 | 12 (17.1) |
| 4. その他の専門的職業 | 4 | 8 | 12 (17.1) |
| 5. 公務員 | 9 | 2 | 11 (15.7) |
| 6. その他 | 7 | 7 | 14 (20.0) |
| のべ有効回答数 | 54 | 24 | 79 (112.9) |
| 有効回答者数 | 48 (66.6) | 21 (55.3) | 70 (63.1) |
| 「まだよく考えていない」無回答の合計 | 24 (33.3) | 17 (44.7) | 41 (36.9) |
| N | 72 (100) | 38 (100) | 111 (100) |

昨年度の新入生と比べて、特に顕著な差は見られない。

問6 不安や悩み

「あなたは、これからの学生生活に関して、何か不安や悩みを持っていますか。」

| | 男 | 女 | 計 | |
|------------------|-----------|-----------|-----------|----------|
| 1. 修学 | 13 | 16 | 29 (50.9) | 単位のとり方13 |
| 2. 学部の内容と将来性 | 2 | 2 | 4 (6.9) | |
| 3. 志望との齟齬(進路の変更) | 1 | 0 | 1 (1.7) | |
| 4. 卒業後の進路就職 | 1 | 0 | 1 (1.7) | |
| 5. 友人, 異性 | 7 | 3 | 10 (17.2) | |
| 6. 課外活動 | 2 | 2 | 4 (6.9) | |
| 7. 健康, 体力 | 1 | 1 | 2 (3.4) | |
| 8. 経済生活 | 2 | 1 | 3 (5.2) | |
| 9. 下宿・寮生活 | 1 | 0 | 1 (1.7) | |
| 10. その他 | 9 | 4 | 13 (22.4) | |
| のべ有効回答数 | 39 | 29 | 68 (17.2) | |
| 有効回答者数 | 34 (47.2) | 24 (63.2) | 58 (52.3) | |
| 「なし」無回答の合計 | 38 (52.8) | 14 (36.8) | 53 (47.7) | |
| N | 72 (100) | 38 (100) | 110 (100) | |

修学上の不安や悩みを訴えるものがふえた(昨年度11名20.8%)。その反面、志望との齟齬を感じ、進路の変更等を考えている者は減った(昨年度7名13.2%)。50年度生の定着率は高いかも知れない。

独立性の検定による設問間の連関

χ^2 検定(2×2)の結果、以下のことがわかった。
 (1)「教養型」の学生(大学で主として教養を高めることをめざしている学生)は、就職を有利にすることにあまりこだわらない。また、大学院進学希望者が比較的多い。
 (2)「専門型」の学生(大学に主として専門的知識・技術を求めている学生)は、上記「教養型」の逆の傾向がある。

昨年度調査では、この部分が未報告だったので、補足すると、――

(3)昨年度新入生(昭和49年度生)においては「教養型」「専門型」の区別がより顕著で、教養型に多い「大学院進学希望者」は、総合科学部の総合性、学際性に期待しており、研究したい学問が明確で、研究者・大学教員等を志す者が多かった。他方、専門型の学生は希望の職種がより明確で、修学上の悩みは少ないという傾向が見られた。

なお、これらの集計・分析には、広島大学計算センターの計算機HUC-IIを使用した。

昭和50年度下記委員会の委員

○コース・講座委員会

(委員長) 荒谷 孝昭 後藤 陽一 上垣内孝彦
 松尾 博 陣崎 克博 高崎 禎夫
 中峯 照悦 小野 茂 高橋 正之
 古前 恒 小此木久一郎 中井 正文
 沢田 和夫 北村 靖治

○就職委員会

(委員長) 藤原 健蔵 今井日出夫 今中比呂志
 大内 侃 岡本 雅典 北村 靖治
 久保 良敏 坂口 昇 松浦 道一

○学務委員会

(委員長) 松尾 博 深萱 和男 村上 誠
 甲斐 祥郎 小林 惇 佐久間元敬
 岡本 哲彦 岡野 正義 藤本 黎時
 福居 和彦 小村 堯 (岩村 聡)

○学生生活委員会

(委員長) 岡本 雅典 金田 晋 伊藤 護也
 秀 敬 井上 則好 山下 和男
 大瀧 敏夫 丹辺 文彦 稲田 勝彦
 宮原 満男 板野 暢之 (小谷 英文)

○広報委員会

(委員長) 田淵実貴男 水島 裕雅 大森 元吉
 羽田野三郎 根平 邦人 菊地 邦雄
 橋本 功 春日野省三
 (学生側「飛翔」編集委員) 野田 泰三 他7名

編 集 後 記

『飛翔PART II?』は、学生側広報委員によって編集された。『飛翔』は本来、教官+事務+学生の三位一体の共同編集という形をとるものである。が、今回教官側より、一度全面的に学生に任せてみたいと申し出があり、学生側も前向きな提案として受け入れた。

創刊号は体裁を整えることもあってカタイものとなり批判もあった。『飛翔』は複雑な性格をもつ事情から、刺激的なものを求める人には物足りなく感じるだろう。しかし、我々にはできる限り弾力的に企画をたてていこうと考えている。時間に追われて不十分なものとなったかもしれないが、本号にその意欲のひとかけらでも見出してもらえればうれしい。

批判や提案、あるいは投稿の形で、どしどし意見を編集部にかけて欲しい。できたての総合科学部がその“存在”を主張するのはこの『飛翔』による。『飛翔』をよりよきものにするため協力して欲しい。

今広報委員会では特に1年生からの委員を募集している。オレたちが創っていく学部だ、と意欲あふれる人はぜひ参加して欲しい。理論派ヤングは批判する。でもそれだけじゃ進歩がない。さあ、みんな“行動”し発展させていこう。(学生M)

第2号は御覧のように学生特集号といったものになったが、広報委としては第2号は学生が日頃から考えていること、不満、希望などを卒直に表現させてやろう、それはまた教職員側にとっても今後の貴重な参考にもなるであろうとの気持から、編集も彼等に任せ次第、果して所期の目的が達せられたであろうか。惜しむらくは日数が足りず学生諸君にも満足のものにはならなかったかも知れぬ。「メタセコイア」との関係もあって「飛翔」の編集に当ってはデリケートな面もあるが、今後総合科学部の充実、発展とともにみんなに愛される部報として伸びて行くよう教職員各位、学生諸氏のご協力を切望する次第です(H)。

